特別の教科　道徳

成田　　翔

自己の課題を解決し続け，よりよい生き方を探究する学習

－道徳性の諸様相を明確にした学びの連続を通して－

Ⅰ　特別の教科道徳研究の方向性

１　主題設定の理由

平成30年４月１日から，小学校において，特別の教科道徳（以下，道徳科）が全面実施となっています。これは，教育再生実行会議の提言や教育の充実に関する懇談会の報告，中央教育審議会答申「道徳に係わる教育課程の改善等について」を踏まえたものであり，道徳に係る「学習指導要領の一部改正」の告示，平成29年３月31日告示の小学校学習指導要領の全面改定によるものです。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の目標は，小学校学習指導要領にあるように「自己の生き方を考え，主体的な判断の下に行動し，自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことであり，道徳教育の要である道徳科の目標は，「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値の理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」ことです。これらのことが，「道徳科で育成を目指す資質・能力」であり，児童一人一人の資質・能力の育成に帰結します。

本校の道徳性の実態を見ると，高学年（４～６年生）の児童が全国平均より望ましい傾向にあります（令和２年６月実施の道徳性アセスメントHUMANの結果より）。これは，６年間の道徳科を始め，教育活動全体を通じた道徳教育の積み重ねの成果と言えます。また，前研究（平成28年～令和元年）において，道徳の教科化に向けて授業の質的変換を目指したことに起因すると推察します。

このように，本校の児童は学年が上がるに連れて道徳性が高まってはいます。しかし，それが道徳的行為として表れているとは言い切れません。そこで，道徳教育の要である道徳科の学習をより充実させる必要があります。

こうした前研究の成果と課題，さらには全体研究主題を踏まえて，道徳科では，研究主題を「自己の課題を解決し続け，よりよい生き方を探究する学習－育てたい道徳性の諸様相を明確にした学びの連続を通して－」と設定しました。

「自己の課題を解決し続け」とは，「児童自身が自ら学び道徳的価値について興味をもち，自己との関わりをもって学習に取り組み続けること」を，「よりよい生き方を探究し続ける」とは，「他者との学び合いを通して，児童自身が道徳的価値について自らの考えを深め，他の教育活動での道徳的実践の指導と関連し合って，一人一人の道徳性が高まること」を表しています。

２　目指す児童の姿とその具体

①自己を見つめ，課題意識をもち続ける児童
②他者の考えと自分の考えを比較しながら多面的・多角的に考えられる児童
③学びを生かして「よりよい生き方」について前向きに捉え直す児童

上記は「①児童自身が道徳的価値に関する今の自分の課題を理解し解決しようとする心構えをもつ姿」，「②これまでの自分の経験やそのときの感じ方，考え方と照らし合わせて，友達と対話したり協働したりして，物事を様々な角度から見て，考え，よりよいことを判断し，表現しようとする姿」，「③どうすればよいかわかっているけれどできない心を，少しでも前向きに捉え直しながら行動しようとする姿」を表しています。

Ⅱ　研究内容の具体

１　道徳性の諸様相を明確にしたカリキュラム構想

道徳性の育成を目指した学びにおいて大切なことは，何を育てるのかを明確にすることです。つまり，道徳科の学びを通して，道徳的判断力を育成するのか，道徳的心情を育成するのか，道徳的実践意欲と態度を育成するのかなど，道徳性の諸様相の何をねらって学びを構想するのかを明らかにすることが重要です。そこで，視点１では，道徳性の諸様相を明確にした道徳科のカリキュラム構想について研究を進めました。

２　道徳性の諸様相に応じた「学習指導過程」と「指導方法」の工夫

道徳性の育成を目指すためには，その要となる道徳科の授業を充実させる必要があります。そのためには，道徳性の諸様相を明らかにし，その諸様相に応じて「学習指導過程」を変えることが大切です。また，道徳的価値に関わる事象について自分事として捉え，互いの考え方，感じ方を交流できるような「指導方法」を選択することも求められます。そこで，視点２では，道徳性の諸様相に応じた「学習指導過程」（表１）と「指導方法」（表２）について研究を進めました。

	道徳性の様相		
	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的実践意欲と態度
【展開前半】	「登場人物への自我関与が中心の過程」	「問題解決的な学習が中心の過程」	「登場人物への自我関与が中心の過程」 「問題解決的な学習が中心の過程」
【展開前半】	共感的追求 （心情変容契機の意味追求） ＜発問の例＞ 「～はどんな気持ちや考えだろう」 「～は何だろう，なぜだろう」 「～ばらどうする（考える）か」	分析的追求 （乗り越えたい心の分析） ＜発問の例＞ 「～はどんな気持ちや考えだろう」 「～は何だろう，なぜだろう」 「～ならどうする（考える）か」 「～についてどう考えるか」	共感的追求 （心情変容契機の意味追求） 分析的追求 （乗り越えたい心の分析）
【展開後半】	道徳的価値の実現場面を交流する。 自己を見つめ，思いを温める。 ＜発問の例＞ 「今までに○○したこと，○○がいいなと思ったことはありますか？」 ※自己評価　等	同構造の道徳的事象について話し合う。 生き方の今の答えをもつ。 ＜発問の例＞ 「あなたは○○の場面でどうしますか？」 ※自己評価　等	生き方の今の答えをもち， 互いに交流し合い，認め合う。 より具体的な場面をイメージして， どうしたいのかを考える。 ＜発問の例＞ 「これから大切にしていきたい○○はありますか？」 ※自己評価　等

表１　学習指導過程

教具
心の円グラフ，心情メーター，表情絵，ネームプレート，場面絵，写真，ミニホワイトボード，ICT等
思考ツール
イメージマップ（多面的に見る），座標軸（多面的に見る），マトリックス（多面的に見る）等
板書
教材の話の流れに沿った板書　（縦書き） 教材文中のAとBの違いを対比した板書　（縦書き，横書き） 授業前半と後半の考えの変化を意識した板書　（縦書き，横書き） 友達との考えの違いを対比した板書　（縦書き，横書き） 授業のテーマを中心に置いた板書　（横書き） ICTの活用　等

表２　指導方法

３　よりよい生き方を探究し続けるための評価

道徳科における評価とは，児童の側から見れば，自らの成長を実感し，意欲の向上につなげていくものであり，指導者の側から見れば，目標や計画，指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものです。そこで，視点３では，「授業で見取る児童の学習状況の評価」と「学習指導過程や指導方法について指導者が自らの授業を振り返る評価」「児童における自己評価」について研究を進めました。

＜３年次研究の重点＞

・多面的・多角的に考える児童の姿を引き出す「指導方法」の工夫
・授業で見取る児童の学習状況の評価

Ⅲ　研究実践

６年生実践　『真の友情とは』Ｂ 友情，信頼

【実践のテーマ】
主人公の友達との関わりの中での気持ちを考えることを通して，
友達と互いに信頼し合って，「真の友情」を築いていこうとする態度を育てる学習

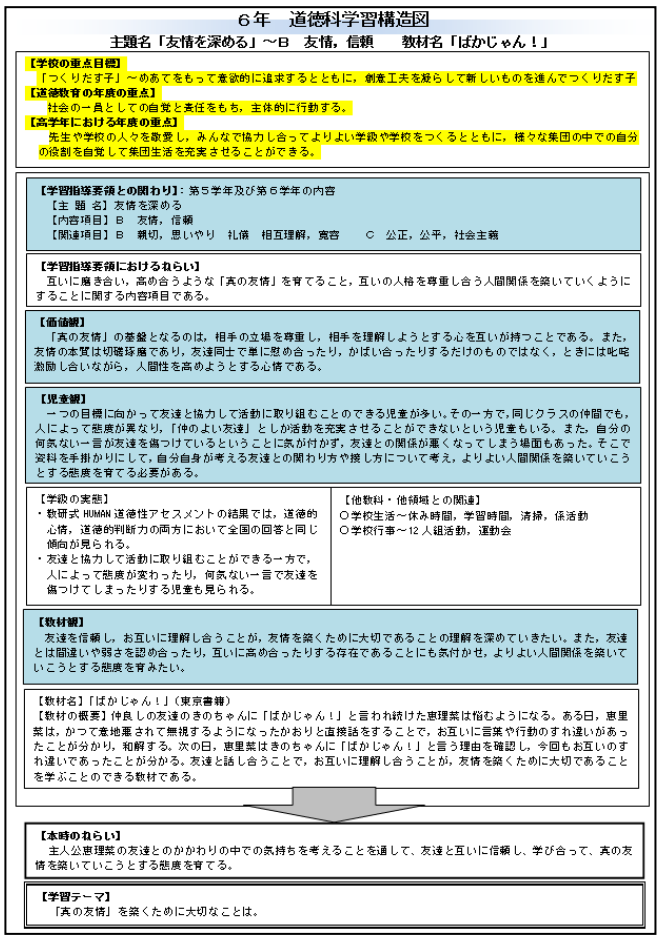
１　研究授業のねらい

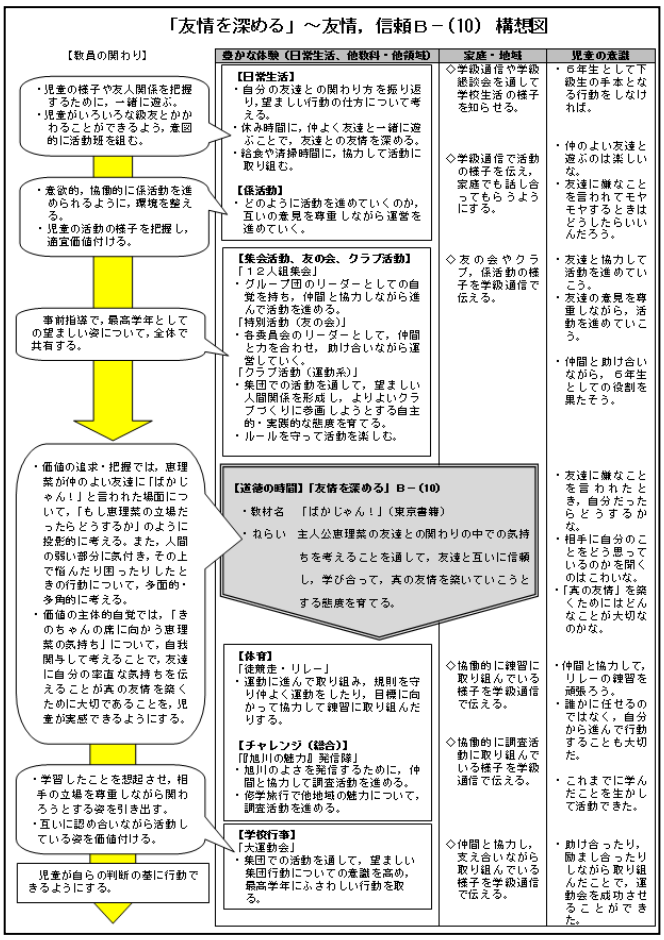
本主題は，学習指導要領特別の教科　道徳編の第５学年及び第６学年における内容項目「Ｂ－主として人との関わりに関すること」の「(10) 友達と互いに信頼し，学び合って友情を深め，異性についても理解しながら，人間関係を築いていくこと」に関わるものです。

高学年は，これまで以上に友達を意識し，仲のよい友達との信頼関係を深めていこうとします。また，流行などにも敏感になり，趣味や傾向が仲間と異なることを避け，閉鎖的な仲間集団が生まれる時期でもあります。「真の友情」の基盤となるのは，相手の立場を尊重し，相手を理解しようとする心を互いがもつことです。また，友情の本質は切磋琢磨することであり，友達同士で単に慰め合ったり，かばい合ったりするだけのものではなく，ときには叱咤激励し合いながら，人間性を高めようとすることが大切です。

本実践では，「真の友情」の基盤となる互いの人格を尊重し合う人間関係に着目することが大切であると考えました。そして，お互いに思いや意見を伝え合うことが友情を築くために必要であることを児童自身が実感し，友情を深めていこうとする態度を養うことをねらいました。

２　本主題に関わる学習構造図と構想図





３　本時の学習

ねらい	主人公恵理菜の友達との関わりの中での気持ちを考えることを通して，友達と互いに信頼し，学び合って，真の友情を築いていこうとする態度を育てる。 補充 研究視点１		
事前の取組	【他教科・他領域との関連】 ・特別活動－係活動での取組	【家庭・地域社会との関連】 ・友達のよさを家庭で話してもらう。	
指導過程	問題解決的な学習が中心の過程 研究視点２		
教具 ツール	座標軸	板書	授業のテーマを中心に置く：横書き

過程	児童の活動	教師の働き掛け・留意点等
方向付け	○「真の友情」について考える。 ・お互いに尊敬すること。　　など ○調査結果を見た感想を交流する。 ・人間関係で悩むことがある。 ・友情って何なんだろう。	○「『真の友情』とは何でしょうか。」 ○事前調査の結果を示す。 ・友達は大切だと思う反面，友達関係で悩むこともあることを確認し，テーマへと方向付ける。
	「真の友情」を築くために大切なことは？	
価値の追求把握	○仲のよい友達に「ばかじゃん！」と言われたときにどうするか，自分の立場になって考える。 ・Ａ：傷つく・確かめる ⇒自分だけ言われるのは納得がいかないから理由を聞く。 ・Ｂ：傷つく・確かめない ⇒話しかける勇気がない…。 ・Ｃ：傷つかない・確かめる ⇒遊び半分だろうけど，今後のことを考えると気になるな。 ・Ｄ：傷つかない・確かめない ⇒きっと私が気にしすぎなんだ。 ◎誤解を解くために，話をしようとする恵理菜の気持ちを考える。 ・また，私の思い込みかもしれない。 ・きのちゃんなら，私の気持ちを分かってくれるはず。	○教材を読む。（P57L10まで） ○「もし，恵理菜の立場だったらどうしますか。」 ・児童が人間の弱さを知り，悩んだときに必要な行動について多面的に考えることができるように，投影的な発問をする。 ・座標軸にネームプレートを貼り，立場を明確にする。 他者理解・人間理解 研究視点２ 評価場面① 多面的・多角的な見方に発展しているか。 （発言，ノート） 研究視点３ ・交流後は，恵理菜の気持ちを座標軸に表す。 ○教材の続きを読む。 ◎「恵理菜はどんな思いで，きのちゃんの席へ向かったのでしょうか。」 価値理解 ・恵理菜に自我関与し，友達に自分の率直な気持ちを伝えることで，真の友情を築こうとする思いを自分事として考えることができるようにする。
	真の友情を築くためには，お互いに信頼し，しっかりと思いを伝え合うことが大切。	
価値の主体的自覚	◇学習の振り返りをする。 ＜振り返りの視点＞ ・分かったこと，明らかになったこと。 ・自分の考えが変わったこと。 ・友達の考えでなるほどと思ったこと。 ・今回の学びをどのように生かすか。	評価場面② 自分自身との関わりの中で，深めているか。 （ノート） 研究視点３
意欲化	○教師の説話を聞く。	○事前調査結果を基に，学校生活で意識していくことについて話をし，意欲付けをする。
事後の取組	【他教科・他領域との関連】 ・学級活動－係活動や運動会に向けての取組 【家庭・地域社会との関連】 ・家族の経験を交えながら，友達との関係が高まっていくような話題やアドバイスをしてもらう。	

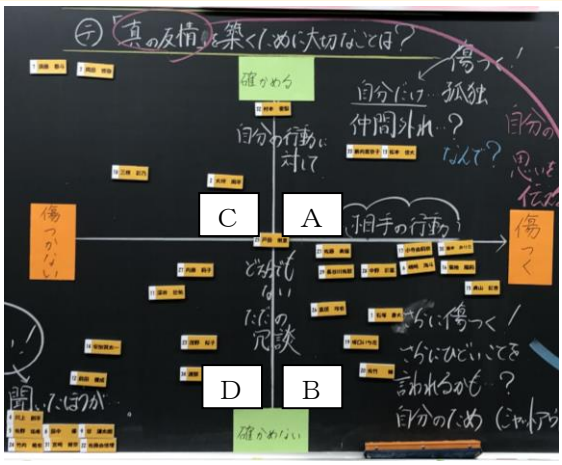
４　授業の実際

「指導方法」の工夫

本実践では，「指導方法」に関して２つの工夫を施しました。

１つ目は，児童が友達との交流を通して価値の理解を深め，多面的・多角的に考えるための手立てとして，「座標軸」を活用したことです。主人公である恵理菜が仲のよい友達に「ばかじゃん！」と言われた場面について，「仲のよい友達に『ばかじゃん！』と言われたとき，自分だったらどうするか。」と投影的な発問をしました。児童は，「Ａ：傷つくから確かめる」「Ｂ：傷つくけど確かめない」「Ｃ：傷つかないけど確かめる。」「Ｄ：傷つかないし確かめもしない」の４つの視点から自分の立場を選択し，黒板上の座標軸にネームプレートを貼りました。児童一人一人の立場が視覚化されたことにより，自他の考えを比較し易くなり，話合いの視点が明確になったことで，多面的・多角的に考え，議論する児童の姿を引き出すことができました。

２つ目は，児童から表出した考え同士を関連付けたり，児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として考えたりするための手立てとして，テーマを中心に置いた横書きスタイルの構造的な板書にしたことです。「Ｂ：傷付くけど確かめない」の立場にいる児童と主人公である恵理菜の考え方が似ていることを矢印で関連付けることで，児童が教材の登場人物と自分を重ねて考えることができました。また，色や太さが異なる矢印を活用することで，価値のつながりや目に見えない心の動きなどを視覚化することができ，児童同士の交流を活性化させたり，思考を深めたりすることにつながりました。

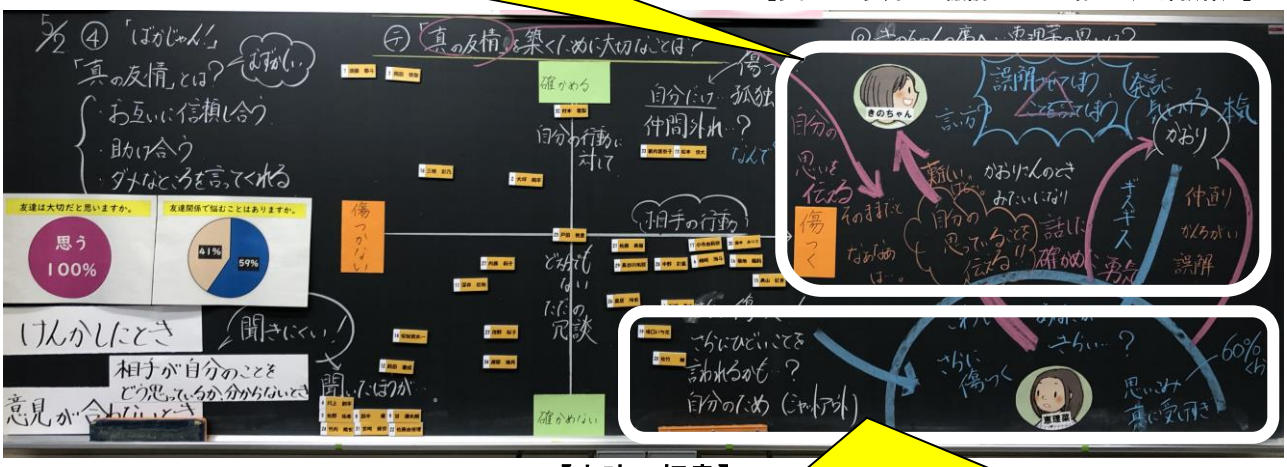


【座標軸上で明確になった立場（板書）】

Ｃ１：「確かめたら，さらに傷つくかもしないから。」
Ｃ２：「傷つくかもしれないけど…。私だったら，『自分の行動』に対して言われていることだから，どちらかというと傷つかない。」
Ｃ他：「う～ん…。」
　Ｔ：「みんなもそう？」
Ｃ３：「いや…。」
Ｃ４：「私は，ただの冗談だと思って流してる！」
※この発言に対して，共感的な姿勢を示す子や首をかしげる子など，様々な反応が見られた。

【多面的・多角的に議論している様子（一部抜粋）】

価値のつながりや恵理菜の心の動き，友達との相互関係などを，矢印を使って図式化しました。



【本時の板書】

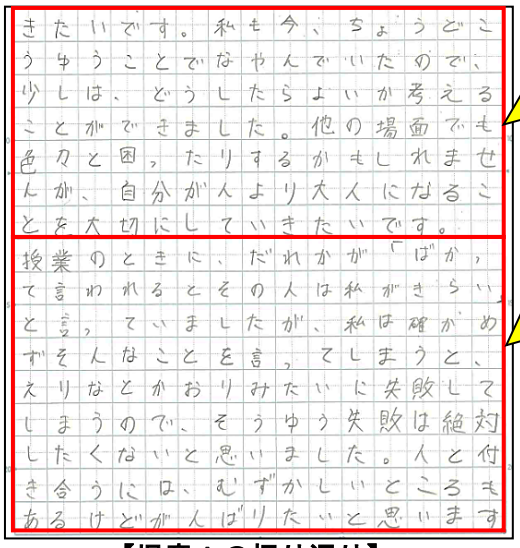
「仲のよい友達に『ばかじゃん！』と言われたとき，自分だったらどうするか。」を，４つの視点で考えた後に，「恵理菜はどの立場なのだろうか。」と問うことで，自分自身との関わりで考える児童の姿を引き出すことができました。

授業で見取る児童の学習状況の評価

道徳科における児童の学習状況を把握するためには，授業者が１時間の授業で一定の道徳的価値について，何をどのように考えさせるのか，明確な指導観をもって授業を構想することが重要になります。そこで，本時の「価値の主体的自覚」の場面では，上記の評価の視点と評価項目で評価しました。

	評価の視点	具体的な場面
価値の主体的自覚	道徳的諸価値の理解を自分自身との関わりのなかで深めているか	・学んだ価値や教材の状況に類似した日常場面について想起する場面 ・現在の自分自身を振り返り，自らの行動や考えを見直している場面
視点	**分類**	**評価項目**
自分自身との関わり	経験の想起	・日常生活や学校生活を想起しながら考えている。 ・自分が家族や友達などにしてもらったことをもとに考えている。
	振り返り	・自分の生活や課題を見つめ，振り返りながら考えている。

【本時における評価の視点と評価】


きたいです。私も今、ちょうどこ
うゆうことでなやんでいたので、
少しは、どうしたらよいか考える
ことができました。他の場面でも
色々と困，たりするかもしれませ
んが、自分がんより大人になるこ
とを大切にしていきたいです。
授業のときに、だれかが「ばか，
て言われるとその人は私がきらい
と言，ていましたが、私は確かめ
ずそんなことを言，てしまうと、
えりなとかおりみたいに失敗して
しまうので、そうゆう失敗は絶対
したくないと思いました。人と付
き合うには、むずかしいところも
あるけどがんばりたいと思います

【児童Ａの振り返り】

児童Ａは，左記のように振り返りを記述しました。

「私も今，ちょうどこういうことで悩んでいたので，少しはどうしたらよいか考えることができました。」と記述していることから，学校生活を想起しながら自分事として考えていることが分かります。

振り返りの後半部分からは，自分と友達の考えを比較し，これまでの自分の経験や考え方，感じ方と照らし合わせながら，考えを深めていることが分かります。
道徳的価値の理解と同時に自己理解を深め，これからの課題や目標を見付けることができています。

このように，評価の視点と評価項目を明らかにし，明確な指導観をもつことで，児童の学習状況を適切に評価することができました。

Ⅳ　３年次研究の成果と課題

道徳科研究では，研究テーマを「自己の課題を解決し続け，よりよい生き方を探究する学習」と設定し，「道徳性の諸様相を明確にしたカリキュラム構想」「道徳性の諸様相に応じた『学習指導過程』『指導方法』の工夫」「よりよい生き方を探究し続けるための評価」の３点を中心に研究を進めました。

３年次研究では，「『指導方法』の工夫」「授業で見取る児童の学習状況の評価」を重点として研究を進めてきました。

１　研究の成果

○思考ツール（座標軸）を活用することで，児童一人一人の立場や考えの微妙な差異が明確になり，多面的・多角的に考え，議論する児童の姿を引き出すことができました。
○テーマを中心に置いた構造的な板書とすることで，児童が教材の登場人物と重ねて考え，自分事として思考を深めることができました。
○評価の視点や評価項目を明らかにし，明確な指導観をもつことで，児童の学習状況を適切に評価することができました。

２　今後の課題

○児童の問いを生かし，道徳的価値に向かって学習を進めていけるようなテーマの設定の仕方について整理していく必要があります。
○事後の活動も含め，カリキュラムについて改善をしていく必要があります。

Ⅴ　参考文献

○小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編　文部科学省　廣済堂あかつき　平成29年６月
○「特別の教科　道徳」で大切なこと　赤堀博行　東洋館出版社　平成29年11月
○「小学校　新学習指導要領　道徳の授業づくり」坂本哲彦　明治図書　平成30年４月
○「道徳の評価で大切なこと」　赤堀博行　東洋館出版社　平成30年11月
○道徳的価値の見方・考え方　赤堀博行　東洋館出版社　令和３年４月